世界の謎赤露を暴く

反革命陰謀の眞相と

ナチス秘密警察の暗躍

ソ聯は崩壊するか？

セン

大場鐵造著

反革命陰謀の眞相と
ナチス秘密警察の暗躍

東京・さんもん書房刊

目次

目次

序

非常時は世界的だ

我國に於ける「非常時」の言葉も既に古い。一九三五、六年の危機を目さしての合言葉と思はれた非常時も、其の危機を研究した今日、果して解消されてゐるであらうか。否、それどころではない。非常時は內に外に益々深刻化するばかりである。對支問題はいつ重大事件勃發の原因となるかもわからない。

然も、今やこの非常時は獨り我が國の專賣ではなくなつてしまつた。スペインの內亂は餘りにも深刻すぎる問題である。ソヴエート・ロシアに於ける反幹部派の陰謀、ナチスの共產主義への宣戰布告等々、又夫等の國々を廻ぐる各國の動搖等、國際間に於ける非常時の暗雲は全世界を覆はんとしてゐる。

この時ソ聯に於ては、トロツキー、ジノヴイエフ一派の反革命運動に、ナチス秘密警察が通謀

してゐた事實を暴露したので、共産主義の本家であるソ聯と、ファッショ國家陣營の前線に躍るドイツとの關係は果然惡化して、兩國間の國交關係はたゞならぬ事態にたちいたつた。

今、世界各國の國交關係をみると、隣國同志はお互に利害關係が餘り直接に影響する爲か、とかく平和が保たれないやうである。我が日本と支那、ドイツとフランス、フランスとイタリー、ロシヤとドイツ、何れの場合も國交關係は圓滿を缺いてゐる。我が國と支那との問題を別にすれば、ドイツとソ聯との國交はもつとも尖銳化した狀態にある。

こゝに筆者は、世界の謎ソヴエート・ロシヤの現狀に就き、今度の反革命陰謀を中心として述べようと思ふ。

現下の我が國策が大陸進出を以て第一義とする以上、ソ聯の國情こそは、吾々にとつて重大關心事でなければならない。

猜疑渦まく——

ソ聯の國內不安

十年間に百七十萬の人命抹殺

スターリンが過去數ケ年、幾度か清黨工作を施さなければならなかつた事は、彼として最も信賴しなければならない筈の「共產黨」內に於てさへ、如何に反革命分子の多いかを物語るものだ「少しでも怪しいものがあれば、直ちに密告す可し。もし密告を怠るものは死刑に處す可し」これはかつて共產黨機關紙「プラウダ」に掲載されたソ聯當局の布告である。人を見たら裏切り者と思へ、この猜疑こそソ聯に於ける一大缺陷であり、亦一面スターリン政權確立の基礎でもあるのだ。

かつて國防大臣ウオロシロフが寵愛してゐた或る女優が、實はゲ・ペ・ウ本部からの廻し者であつたと言ふ話がある。とに角猜疑の眼はあらゆる人身の上に注がれ、又注ぐ人自身の上にも、

何日何時猜疑の眼が光つてゐるかわからない。

ゲ・ペ・ウは過去十年間に於て、無裁判銃殺によつて百七十萬の人命を暗から暗へ抹殺したと云はれてゐる。然もこのゲ・ペ・ウに働くものに對してさへ、常に猜疑の眼は光つて居るのだ。「ゲ・ペ・ウに働く者は、敵の手によつて倒れるか、しからずんばゲ・ペ・ウ自身の手によつて葬られる」と言ふ格言さへ信じられてゐる有樣である。

このゲ・ペ・ウの無裁判銃殺制は、一九三四年五月、全世界の非難に耐へかねて廢止されてしまつたが、スターリンはこれに代るものとして、同年十二月「テロリズムに對する公判には、檢事及び辯護人を參加せしめず。判決に對する上訴及び減刑の請願を許さず。死刑は判決後直に執行す可し」と言ふ新法律を制定し、事實上に於てゲ・ペ・ウの無裁判銃殺制を復活したのである。

或る外國人がスターリンに會見した際、

「貴下はいつまで人を殺すつもりであるか」

と質問したら、スターリンは

「必要のある限り殺す」

と答へたさうである。

スターリン自身でさへ、其の身邊の同志に對して絶對の信用が置けないのだ。彼とても何日何時自己の地位を奪はれるかわからない不安がある。

一九三五年五月、かつて革命に最も功勞のあつた共產黨員のみで組織されてゐた「ボリシエヴイキ協會」を、スターリンは突如解散してしまつた。今日のスターリンにとつては、過去の革命に於ける功勞などは、もう何の意味も持たない。「彼等の政治的使命は終れり」と言ふのが古い黨員に對するスターリンの態度であつて、必要なのはスターリン個人の信賴し得る新しい忠實なる支持者である。

昨夏以來、ドンバスの一炭坑夫スタハノフによつて始められたスタハノフ運動も、表面はあくまで能率增進運動であるが、實質的には、この運動に參加する少數の勞働貴族（新技術家階級）によつて、黨外ボルシエヴイキ團體を結成し、つまりはスターリンの擁護を目的とするものであると言はれてゐる。

一昨年のキーロフ暗殺事件に端を發した、今夏のトロツキー、ジノヴイエフ一派の反革命陰謀の綮講は、其の執拗な點に於て、スターリン政權をおびやかすに十分であり、クレムリンの指導

者を驚愕せしめ、ジノヴィエフ等十六人の大量銃殺を行つた。これもつまりは數年來の癌を取り除いた程度のものであつて、これによつてスターリン政權の不安が全く解消されたものとは考へられない。

現に反革命運動の一方の指導者トロツキーはノルウエーに亡命中であり、其の國外に於ける反革命運動がいつ再建されるかも計り知れないのだ。

スターリンとトロツキーの思想的相剋

反スターリンのテロ陰謀の發端

レーニンの死後、今回銃殺されたジノウイエフ、カーメネフは、スターリンと共に共產黨三頭政治を布き、其の聲望は甚だ高かつた。然し共產黨首腦者等は機會あらば、レーニンの地位に取つて代らんとする野望を抱いてゐたのである。中でスターリンとトロツキーの兩者の關係は、倒

れるか倒されるかのどちらかであつた。

トロツキーの共產主義の純理論に立つ「永久革命理論」とスターリンの「一國社會主義政策」とは、當然正面衝突となり、トロツキーによつて代表される極左派と、ジノヴイエフ、カーメネフ一派とは、スターリンの「一國社會主義政策」を否定する點と、スターリン政權を轉覆せしめる點に於て同一立場を取る事となり、反スターリンの旗をかゝげて大同團結したのである。

この結果、トロツキーは一九二五年、軍務人民委員の職を奪はれ、一九二六年の秋には政治部委員の地位を失ひ、續いで中央執行委員の地位も奪はれる事となつた。然しこの間ジノヴイエフ、トロツキー等の反スターリン地下運動は執拗に續けられた爲、一九二〇年遂にトロツキーは國外に追放されてしまつた。然し亡命中のトロツキーはあらゆる手段と方法を用ひて、ソ聯內の同志と連絡を保ち、一九三二年ジノヴイエフ派からはジノヴイエフ、カーメネフ、エヴタキーモフ、バカエフ、トロツキー派からはスミルノフ、ムラチコフスキー、テル・ワガニヤン等が相會して、イリンスク別莊に反政府祕密聯合會を開き、「モスクワ・ツエントル」と言ふ祕密結社を結成し、第一次五ケ年計畫が最も困難なる時期に直面し、ソ聯が政策的に危機に直面するのを機會に、テロリズムによるスターリン政權の轉覆を企てたのである。

この計畫によれば、先づスターリンをはぢめ、ウオロシーロフ、キーロフ、カガノヴイツチ、オルジヨニキーゼ、ポストシエフ、ジダーノフ、コシオル等の黨及び政府の最も重要なる人物を一齊に暗殺し、其の混亂に乘じて、現在黨に留つてゐるジノヴイエフ、カーメネフ等を中心として、同志に政府の重要なる地位を與へ、やがてはトロツキーを迎へて政權を掌握せんとしたのである。

ジノヴイエフ、カーメネフ等はゲ・ペ・ウの眼を逃れるため、現幹部派に一應は歸順した如くに見せかけつゝ、着々として陰謀計畫を進めると同時に、右傾派の元財相ソコルニコフ、中央執行委員候補トムスキー、現遞信大臣ルイコフ、ソ聯言論界の第一人者であるプラウダ紙主筆ラデツク及びイズヴエスチヤ紙主筆ブハーリン、前國立銀行總裁ビヤタコフ等に呼びかけて、彼等の反スターリン的な思想を利用して、第二陣の役割を演ぜしめんとしたのである。

尙バカエフに對しては、やがて來たらんとするトロツキー、ジノヴイエフ政權のゲ・ペ・ウ長官の地位を與へる約束のもとに、陰謀事件の直接關係者の抹殺を委託したと云はれる。

この國內に於ける策謀と共に、國外に於てはトロツキーの息子のシエードフがドイツ、チエツコ等の各地に暗躍して、ソ聯內にあるトロツキー一派と連絡を取り、テロリストとしてオリベル

グ、ベルマン・ユーリン、フリツツ・ダヴイド、モイセイ・ルリエ、ナタン・ルリエ等をソ聯に送り込んだ。彼等テロリストのソ聯入國について、ドイツ秘密警察（ゲシタボ）が援助を與へ、種々の便宜を計つた事が、後にソ聯當局によつて暴露された結果、ソ獨關係にセンセイションをまき起し、ソ獨兩國の國交に重大危機をまねく素因をつくつた。

クレムリンを恐怖せしめた
キーロフ暗殺事件
執拗なテロリズム

テロ陰謀に於ける彼等の計畫は着々進行し、スターリン暗殺にはダヴイド、キーロフの暗殺はニコラーエフ一派、ウオロシロフはムラチコフクヂミチエフ、シユミド等、カガノヴイツチ、ヂダノフ、オルヂヨニキーゼ等の暗殺はドレイツエル、モイセイ・ルリエ等が當る可く、全ての用意は整つたのであるが、ソ聯要人の身邊の警戒は嚴重を極め、なか〳〵決行の機會に惠まれなか

つた。
この様な情勢のうちに、彼等の計畫は一九三四年十二月一日、レニングラードに於てニコラーエフの手によるキーロフ暗殺によつて口火を切つたのである。スターリンの信任あつく、其の片腕ともみられてゐたキーロフが、白晝スモリヌイの役所で、ピストルをもつて暗殺された事は、クレムリンの首腦部を極度に驚愕せしめた。
この事件が反革命分子テロ團の手によつて爲されたのである事は直ちに推斷され、狼狽した首腦者はレニングラード、モスコウは勿論のこと、ミンスク、キエフ等にまで檢擧の手をのばし、反革命分子として銃殺されたものは、當局の發表だけでも百五名の多數にのぼつたのである。ソ聯當局は、この事件を機會に、ジノヴイエフ、トロツキー一派の反革命分子の徹底的な掃滅を期し、下手人であるニコラーエフを愼重審理した結果、彼がジノヴイエフ一派の反革命分子から成るテロ團體の一員である事が判明した。
このテロ團がテロリズムによつてスターリン政權を倒し、トロツキー、ジノヴイエフ政綱によつて現政治を變革せしめんとする企のものである事が判明した結果、キーロフ暗殺に直接關係のあつたニユラーエフ以下十四名は極刑に處されたのであるが、「モスクワ・ツエントル」は明る

みに出なかつた爲、ジノヴイエフ、カーメネフ等が、どの程度まで關係があるのか判明せず、結局事件誘發に對する精神的影響の責任を負はされ、一九三五年一月十五、十六の兩日、聯邦最高裁判所軍事部公判では、ジノヴイエフ外三名を十年禁錮、シヤロフ外四名を八年禁錮、フエヨドロフ外六名を六年禁錮、カーメネフ外二名を五年禁錮に處して、この事件も一應打切られたかにみえた。

かくしてジノヴイエフ派の巨頭は、其の活動を封じられたが、トロツキー派のスミルノフ等は何の嫌疑も受けなかつたので、殘る「モスクワ・ツエントル」の一味は、一層連絡を密にして次の行動に進み、オリベルグ、ルリエ、ダヴイド等はキーロフ事件後も暗殺の機會をねらつてゐたが、其の後當局要人の身邊警戒は益々嚴重を極め、遂に其の目的を達する事が出來なかつた。

昨年の第七回コンミテルン大會では、ダヴイドはピストルをポケツトにしのばせて會場に入つたが、幹部席に近よれず失敗した。ジノヴイエフの秘書であつたバクダーノフは、決行の最後の一瞬に失敗し責を負つて自殺した。ウオローシロフに對しては、チエリヤーピンスク視察中に決行する計畫が齟齬したので、ルリエ兄弟が國防省のかたわらに彼の登廳、退廳時をねらつて機會を待つたが、これも結局は機會に惠まれずにしまつた。ジダーノフは今年のメーデーに、レニン

グラードで、ルリエ兄弟に狙はれたが、危い處で危險をまぬかれた。
スターリンに對しても、今年のメーデーの機會を狙つたのであつたが、これも遂に其の目的を達する事が出來なかつた。
かくするうちに、當局の檢索は一層嚴重となり、キーロフ暗殺事件後、トロツキー、ジノヴィエフ派の反政府革命陰謀と、ドイツ秘密警察との連繋は、一年半にわたる當局の愼重な調査の結果暴露され、つひにテロリストの一齊檢擧となつて、この未曾有のテロ陰謀事件の全貌が白日下に暴露される時が來た。

アラビヤン・ナイトの
陰謀暴露の端緒
陰謀の裏に躍るナチス秘密警察

ソ聯檢察當局の手によつて、以上のテロ陰謀の全貌が、白日下に摘發された動機は次の通りで

ある。

國外に亡命中のトロツキーと、國內にあるトロツキー派の代表であるスミルノフ及びナチス秘密警察との間に、秘密文書の傳令をつとめたゴリツマンといふ男がゐる。彼がソ聯のゲ・ペ・ウに逮捕された時、二重底のトランクからアラビヤン・ナイトを利用した暗號文書と、トロツキーの「スターリン暗殺」の指令原文が發見された。この秘密文書によつて、スターリン以下の巨頭暗殺の爲に、ソ聯に潜入したオリベルグ・ベルマン・ユリン、ナタン・ルリエ、モイセイ・ルリエ等のテロリストは、實はトロツキーとナチス秘密警察の共同工作によつて派遣されたものである事が發覺した。

このやうな確證を當局に握られた以上は、彼等も絕對絕命、當局の摘發に屈伏するより外なかつた。執拗な反革命運動も遂に失敗に終つたのである。オリベルグは公判廷に於て、ナチス秘密警察と聯繫のあつた事を認め、トロツキーよりスターリン暗殺の指令を受けて、ナチス秘密警察の便宜により、三度ソ聯に潜入した事實を自白してゐる。ルリエ兄弟も、モスクワでスターリン暗殺、チエリヤビンスクでオルジョニキーゼを暗殺す可く、ナチス秘密警察から送られたものである事、又フリッツ・ダウイド、ベルマン・ユリンも、

スターリン暗殺の第三陣として、トロツキー並にナチス秘密警察から送られたものである事が判明した。
ダウイドは、一九三三年トロツキーと直接面談した際、トロツキーが「もしソ聯が日本と戰爭した場合、現在ソ聯内の不平は終熄するだらうか」と自問し「否、むしろ不平は高潮する。吾等はその際民衆を武裝して現主腦部を放逐すべきだ」と述べたと自白してゐるが、これは吾々の注意すべき點だらう。
この事實によつてみれば、スターリン以下、ソ聯の巨頭連の運命は、實に風前の燈火であつたのだ。
かくして反政府革命派の巨頭ジノヴィエフ、カーメネフ以下十六名は、今年八月一齊に銃刑に處せられてしまつた。かつての共産主義革命の英雄であり、功勞者であつた彼等としては、餘りにも皮肉な運命であつた。其の公判に於ける彼等の供述に就ては後述する事にする。
こゝに我々の興味を惹く點は、この反政府革命の陰謀が、トロツキー一派、ジノヴィエフ一派及びナチス秘密警察の三重關係にあつたがために、ソ聯の内情が其の最も憎んでゐるナチスには筒抜けにわかつてゐたことである。

このことはソ聯當局を最も刺戟した點であつて、この事實のために、反革命派の巨頭の處斷をこと更に急ぎ、第二インターナショナルから、スペインの内亂によつて、國際左翼陣營の一角がおびやかされてゐるこの際、左翼戰線强化の上から、ジノヴイエフ等の罪を輕減しては、との申し出のあつたのも一蹴して、極刑を以て處斷してしまつたのではないかと思はれる。

尙トロツキーは此の間、ジノヴイエフ、カーメネフ等を國外に救ひ出すべく計畫したが、これは遂に失敗に歸してしまつた。然し彼の過去に於ける經歴は、海外に於ける活動の舞臺を決してせばめるものではない、ソ聯當局は、トロツキー父子を陰謀事件の主謀者と認め、彼等をソ聯の領域に發見すると同時に、逮捕、極刑に處すと宣言する一方、オスローに居るトロツキーを國外に追放して吳れとノルウエー政府に要求したが、ノルウエーの左派は一齊にトロツキー擁護の態度を表明してゐる。

全露を震駭させた公判に於ける

敗殘革命家の陳述

悲慘な權力爭奪の內幕

かつての輝ける共產黨中央委員として、盛名を謳はれ、國家的の尊敬の的であつたジノヴイエフ以下カーメネフ、バカーヱフ、エヴダキーモフ、スミルノフ、ムラチコフスキー、テル・ワガニヤン、ドレイツエル、レインゴリド、ゴリツマン、ルリエ兄弟、ピツケル、オリベルグ、フリツツ・ダウイド、ベルマン・ユリン等十六名の公判は、モスクワの聯邦會館に於て、本年八月十九日より五日間晝夜にわたつて開廷され、二十四日には十六名全部に銃刑の斷罪が下された。

敗殘の革命家の口から語り出されてこのテロリズムによる反命革運動の全貌は、全ロシアを震駭させるに十分であり、その公判廷に於ける情景は誠に劇的のものであつたとの事である。

公判廷ではさすが雄辯を誇つたジノウィエフ、カーメネフ等も抗辯の餘地なく、素直に次の如

く供述してゐる。

カーメネフ

「テロリズムによる陰謀計畫は、自分とジノヴイエフ、トロツキーの三人で組織し、指導した。余は只社會主義國に於ける政治的勝利は可能であるといふ唯一の意義で、黨指導部の政策が勝つたことを認める。我々は黨指導部の分裂に期待したが、これは失敗した。我等は又ルイコフ、ブハーリン、トムスキー等の右傾派に期待する所があつたが、彼等が黨指導部より遠ざけられて、之も亦期待がはずれた。又コルホーズ工業化强行政策進行の途次、黨指導部の失脚となるが如き危機の到らんことを待望したが、失望に終つてしまつた。我等に殘された途は只二つである。即ち全く反黨運動を清算するか、或は大衆の支持も、一定の政策もなくとも、テロリズムによるかいづれかであつた。我々は第二の手段を選んだが、これは黨指導部に對する心底よりの憎惡と、政權に對する渇望からであつた」

彼は檢事ウイシンスキーの

「それでは被告のテロ手段の動機は、低級な個人的政權欲か」

との問に對し

「さうだ。我々一派の政權渇望だ」
と答へてゐる。
尙彼はウイシンスキーが、一九三三年カーメネフが送つた黨に對する誤謬清算告白書は何を意味するか。虛僞かとの問に對して、それは虛僞、背信よりも惡いもの「反逆」だと述べてゐる。
又ジノヴイエフは、ウイシンスキーの
「被告はドイツ・フアシストとの通謀について否定はしないだらう。一體マルキストとしてテロ手段及びフアシストとの連繫は許さるべきであるか」
との問に對し
「我等には黨內に發言の自由も、運動も許されないのだ。かゝる狀態にあつては凡ての手段を利用しなければならない。君も歷史家である以上、ラツサルが革命運動にビスマルクを利用した歷史を知つてゐるだらう。我等が何故ドイツ秘密警察ヒムレルを利用してはいけないのだ」
と述べてゐる。
バカエフと、トロツキーの代表スミルノフ二人は、頑强に陰謀事件を否定し續けたが、結局晝夜五日にわたる公判後「狂犬の如き被告をすべて極刑、銃殺にすべし」といふ論告が下され、被告

等に最後の言葉が許されたので、いよ〳〵銃刑の確定を前にして、さすが感慨無量の彼等は次々に立つて一言づゝ述べた。この際に於けるカーメネフと、ジノヴィエフの言葉は後述の如きものである。

かくて八月二十四日、裁判長ウリリツヒによつて「すべて極刑、銃殺に處す」と判決は下された。被告等は法規によつて罪の輕減を中央執行委員會に申請したが、それも直ちに却下され、その日の午後判決通り處刑されてしまつた。

其の最後の場面は、執行者以外誰も見た者はないだらうが、傳へられるところによれば、カーメネフは從容として死についたそうであるが、ジノヴィエフは意氣喪失して憐れな姿であつたとの事である。バカエフは執行者を罵倒して倒れ、ナチス祕密警察から送られたテロリスト等は、トロツキーが連坐しなかつたことを殘念がつたといふ事である。

かつてはプロレタリア革命の英雄として、國家的の尊敬をあつめてゐた彼等が、反逆の徒として銃殺の極刑に處せられた日、皮肉にもモスクワ郊外のクシンスキー飛行場では、丁度航空祭が行はれて、集つた數十萬の民衆はスターリン政權萬歳を唱へてゐたのであつた。

カーメネフとジノヴイエフの
死を前にせる告白
反逆者の辿る必然の運命

カーメネフ

「余は十餘年にわたつて黨、政府殊にスターリン個人に反抗して鬪つて來た。余は此の間あらゆる政治的手段、公然たる政治的論爭から祕密文書の宣傳、工場への働きかけ、黨への僞瞞手段、街頭での煽動、陰謀、そして最後にテロ手段までも敢行した。歷史上何處をさがしても、我々が十年間鬪つて來た樣な政治鬪爭の例を見出すことは出來ない。又歷史にはこれだけ長い期間敵に猶豫を與へたものはない。十八世紀のブルジョア革命に際しても、敵に許した期間は僅かに一週間か數日にすぎなかつたが、プロレタリア革命は十年間にわたつて、我々に誤謬を訂正する餘裕を與へた。

然し我々はこれをしなかつた。自分は三回にわたつて黨に復歸を許されたが、今や三度目に再びテロ陰謀で裁かるゝに至つた。前二回迄は生命を恕されたが、今度は我々が寛容の限度を破つたのであるから仕方がない。

我等はこゝにジノヴィエフ等と共に、外國の祕密警察の代表等と同席して裁かれてゐる。これは偶然のことであらうか。否偶然の同席ではない。我等は武器を選ばなかつた。外國の秘密警察の代表と同席するのも、必然の運命であつたらう。實に我等はフアッシズムに屈伏した。我等は外國の出兵に道を開かうとしたのだ。凡そ反逆の道はこの穴に陷る運命であつたのであらう」

ジノヴイエフ

「余がスターリン等首腦部暗殺の目的のために、トロツキー一派と合同した事は過ちであつた。又余はキーロフ暗殺の首謀者としての罪を認める。

余の獨特なボルシエヴイズムは、反ボルシエウイズムに轉化した。余はトロツキズムをとほしてフアッシズムに走つた。トロツキズムはフアッシズムの一變形であり、ジノヴイズムは又トロツキズムの一形態であつた。

余に對する最も殘酷な懲罰は、余の右にオリペルグ、余の左にナタン・ルリエが立つてゐるこ

とだ。余の名も彼等と結ばれつゝあることこれだ」

事件後に殘された
ソ聯國内の諸問題

スターリン危篤說傳はる

さしもの事件も彼等十六名の死の處刑を以て一段落を告げたのであるが、しかしまだ多くの問題が殘されてゐる。

モスクワ・ツエントルに連絡があつたと睨まれてゐる、サフオーノワ、ゲルチク、グリンベルグ、ガウエン、カレフ、グヂミチエフ、コンスタント、セトリン、オリベルガ・パウリ、ラヂン、フアイヴイロウイチ、シユミツド、エステルマン等十三人は審議續行の必要があると認められ、現在豫審中である。

又テロ陰謀の第二陣をつとめたと云はれるトムスキー、ラデツク・ブハーリン、ルイコフ、ソ

コリニコフ、ピヤタコフ、セレブリヤコフ等、現在黨及び政府の重要な椅子にある彼等に對しても、檢索の手がのべられてゐるのだ。

殊に國營出版局は反革命分子の巢窟とみられて居り、局長トムスキーが公判開廷中の八月二十二日に自殺を遂げたので、一層疑惑の眼を深め、しかもフリッツ・ダヴィド、ベルマン・ユリンが最近まで働いてゐたところでもあるので、ことさら檢索の手はきびしいやうである。

當局としては、此の際、反革命分子の巢滅を期し、徹底的な檢擧を斷行するであらう。こうする事は反革命的な分子に對する將來のみせしめにでもあるのだから。

しかし之を以てソ聯の政治的、社會的不安が完全に取り除かれるであらうとは思はれない。例の能率增進のスタハノフ運動が盛になると共に、之に參加する新技術家階級が勃興して、黨外ボルシエヴイキ國體を結成し、次第に共產黨員の地位を奪ふ形勢を示して來たので、古い黨員の間に不平がみなぎつて來たこと、又このスタハノフ運動に參加しない多數の勞働者は、この運動に參加する少數のいはゆる「勞働貴族」に自分の給與を搾取されるため、不平を持つてゐることなど、不平不滿の氣運が相當濃厚にみなぎつてゐる點を見逃すことは出來ない。これはスターリンが、自己擁護のためにしたことが、皮肉にも逆に不安が增大する結果に陷つてしまつたのだ。

又各地に於て、古いジノヴイエフ、トロツキー殘黨が、巧みに黨內に潜入してゐることも事實である。

オスローに亡命中のトロツキーが、ナチスと密接な聯絡を保つてゐる以上、國外に於ける策謀は今後といへども續けられるであらうし、それがソ聯が危機に直面した場合は、何日何時反政府運動を盛り返してこないとも限らない。

一方ヒツトラーの東方進出の方略は、ニユルンベルグのナチス黨大會で公然と示された如く、ウクライナの寶庫は勿論、ウラルの工業地帶、シベリヤまで侵入の機會を狙つてゐるのだ。今度の事件を以て、ナチス秘密警察がソ聯國に於ける活動を停止するとは考へられない。ソ聯の非常時もまだ〳〵今後續くことだらう。

折も折フランスのプープル紙が、革命當時レニンと行動を共にし、最近ゲ・ペ・ウの追求に堪へかねてフランスに亡命したソ聯人の談として、スターリン危篤說を報道した。

彼の語るところによれば、スターリンは目下心臟病惡化の爲め、危篤に陷つて居るが、周圍の人々はこの事實を漏らせば、反幹部派の乘ずるところとなり、內亂勃發の危險があるので嚴秘に付してゐるとの事である。

この報道は我々をうなづかせる一應の根據がある。スターリンは八月十日、極地飛行に成功し

この報道は我々をうなづかせる一應の根據がある。スターリンは八月十日、極地飛行に成功した飛行家のモスクワ歸來の歡迎以來、當然出席しなければならないはずの席上にすら姿をみせない。八月二十五日のソ聯航空祭には、每年赤色廣場に立つて、クレムリン宮殿の上空を飛ぶ赤軍大飛行隊を滿足さうに跳めるのが例であるのに、本年は遂に姿をみせなかつた。

又ソ聯要人の葬儀には、必ず自ら棺の端を擔ふのが通例であるのに、八月二十七日に行はれたカーメネフ將軍（陰謀事件のカーメネフとは同名異人）の葬儀には、姿すら見せなかつたのである。この事實はスターリンの重病說を充分に裏書するものとして報道されて居る。

又スターリンが公開の席上に姿を現さなかつた理由として、反革命分子のテロを恐れての結果だといふ說もある。然しスターリン以外の當然テロの對照となるべきアンドレーエフ、カガノウイッチ、オルジョニキーゼ、ウオロシーロフ等の要人等は出席してゐるのであるから、スターリンのみ獨り姿を見せなかつたことは、やはり病氣說を事實とみるのが本當だらう。

クレムリン宮の法王

スターリンを支配するもの

成功した「猜疑」の愛國運動

昨年來、ソ聯當局は「階級的反革命分子に對しては、極端な憎惡の念を抱け」といふ標語のもとに愛國運動を起した。これはスターリン獨裁の血祭りにあげられた同志の死刑が相ついで行はれるのに對して、民衆が「何故同胞をかくの如き悲慘な運命に陷れねばならないのか」といふ疑問を抱くやうになつた結果、民衆の心に「憎しみの心」を徹底的にうえ付け、民衆を根本的にスターリニズムのソ聯型に打直す必要にせまられた結果である。

かつてのロシア人は、他の何れの國民よりも宗教的欲求の熱烈な國民であつた。然し現在のソ聯には宗教はない。これは「吾人はクリスト教及びその教徒を憎む。何故ならば隣人愛と慈悲を說く彼等は、吾人の主義に背馳するからである」といふ方針のもとに、國內から宗教を追ひ拂つ

てしまふことに成功した。

とに角ソ聯當局は、主義方針を國民に示して之を強要する。もしもこれに反對の態度をとる者があれば、直に社會から抹殺されてしまふ。

今度の事件に於ても、ジノヴイエフ、カーメネフ等が、黨を裏切つて反革命の陰謀を企てたと云ふ事は、彼等のプロレタリア革命に於ける功績や、その閲歴から見ても、一般の常識からは政府當局の發表があつた時でも、なほ諒解出來ない事であつた。然し公判廷に於ける彼等の陳述が公表されるや、全國の輿論は彼等反幹部派に對して、賣國奴、變節漢といふ罵倒をあびせかけ、「彼等を銃殺せよ。我等の愛する指導者スターリンを狙ふものを除け」

といふ叫びをあげたのである。

其の判決公判廷に於ても、裁判長から判決が言渡されるや、傍聽者は一齊に拍手を以てその判決を支持する事を表明し、滿足したと云ふことである。これは吾々にはとうてい諒解出來ないことだ。たとへ現在の彼等が反逆の罪によつて裁かれる被告であるとは言へ、かつては國家の功勞者として尊敬されてゐた人々なのである。その彼等の斷罪に對して、冷酷な拍手を送つたと云ふ事は「階級的反革命分子に對しては、極端な憎惡の念を抱け」といふソ聯當局の民衆に對する

宣傳が、如何に効果的であつたかといふことを物語るものではないだらうか、
これは結局、スターリン獨裁權强化の反映とも見る事が出來やう。
クレムリン宮殿の二つの門は、今日でも公開はされて居るが、最高當局が交付してくれる門鑑を持つて行つても、なか〳〵入門は許されない。先づ門前の赤軍哨兵が提示した門鑑の眞僞を確めた後でなければ入門出來ない。スターリンこそは今や共産主義の法王であるのだ。
然しスターリンすら眼に見えない絶對的の或る權力に支配されてゐる！　ではターリンを支配するものは誰だ？
それは「精疑」である。

× × × × × × × ×

今度の反革命運動にナチス秘密警察の聯繫のあつた事は、ソ獨兩國の國交に大きな衝動を與へた。ソ獨は本質的にみて思想的に相抗立する國家である。ナチスが如何なる意圖のもとに反革命運動に援助を與へたかを知る爲に、兩國の關係を簡單に説明しよう。

ナチス秘密警察が反革命陰謀に協力した意圖は何處にあるか？

宿命的なソ獨の抗爭

ドイツのナチスは、歐洲大戰後ドイツの國力が疲弊その極に達した時、國內の社會的不安の間隙に乘じて勢力を得た共產主義を正面の敵として起ち、之を排擊し、遂に克服した國民主義である。こゝにソ獨が相容れない根本的の素因がある。

フランスもかつては共產主義排擊のために、敢然ソ聯と抗爭し、資本主義國陣營の先頭に立つてゐたのであるが、ヒツトラー現れてドイツの國力が充實し、新興ドイツが眼醒ましい飛躍を遂げてからは、其の宿命的な對獨恐怖感から、最も憎惡してゐた共產主義と妥協して、ソ聯との敵對關係を淸算し、其の上對獨軍事同盟さへ結ぶことになつた。

この結果、ドイツは二大强國に狹擊される結果となり、勢ひ軍備の必要を痛認して、軍備の擴張を斷行し、ヴエルサイユ條約の破棄となつた。これは正しく自衛的行動で、對佛侵略の確たる

目的をもつたものではなかつた。むしろフランスよりも共産主義國ソ聯に對する防備であつたのである。

本年三月、ラインに進駐した際も、ヒツトラーは「ライン進駐は對佛侵略の目的のためではなくして、ソ聯の攻勢に備へて後顧の憂ひを斷つにある」と言明してゐる。これは最近のソ聯に對する態度にみても明かな事實である。

これをソ聯側からみれば、ナチス・ドイツは、かつてドイツに植付けた赤色地盤を根底から破壞した思想的對立勢力であり、又ソ聯領土を覘ふ國として、外交政策も國防政策も、すべてナチス・ドイツとの對抗を目標として來た。聯盟加入も、佛ソ軍事同盟も其の政策の現れであつた。

こゝにドイツはナチス秘密警察（ゲシユタポ）の手によつて、ソ聯の反幹部派に働きかけて、反革命陰謀に援助を與へソ聯の國內攪亂を企んだ。これは大戰によつて全植民地を失つたドイツとしては、缺乏した物資を何處からか得なければならない狀態にあつたので、先づ眼をつけたのがウクライナの寶庫であつた。其の結果、生れたのがヒツトラーの「東方進出の方略」である。其の上思想的に對立するソ聯である。秘密警察がソ聯の反幹部派と通謀して事をかまへたのは、當然の成行であつたのだ。

この間に於ける消息は前述の如くであるが、ソ聯國内の反幹部派の陰謀が不成功に終り、ナチス秘密警察が反革命運動に種々の援助を與へた事まで暴露された結果、果然ソ獨關係は惡化し、ソ聯は西部國境に大軍を移動して、國境警備を嚴にし、徴兵適齡を二十一歳より十九歳に引下げて兵力の擴充を計れば、ドイツも直ちに兵役年限を二年延長して應酬し、ナチス黨大會に於ては敢然共産主義への宣戰を布告して大衝動を與へた。

本年九月、ニユルンベルグに於ける第八回ナチス黨大會に於て、外交部長アルフレッド、ローゼンベルグは、其の席上、共産主義の脅威を強調して其の毒舌を振つて曰く、

「ロンドン、パリ、マドリツド、廣東等、世界の大都市は今や社會苦に呻吟する男女で充滿し、殘忿飽くなきボルシエヴイズムの生贄となつてゐる。玆において一九三六年第八回ナチス黨大會は再びボルシエヴイズムと、世界のユダヤ禍に對する果敢な闘爭開始を宣言せざるを得ない――ボルシエヴイズムは、人類生活の政治的文化的根底としての民族感情を否定する。然も彼等が諸外國に向つて宣傳するに當つては、各國々別に人種的反感を煽動し、現存社會機構の破壞を企圖するのが常套手段である。ボルシエヴイジムは、資本主義を不倶戴天の仇敵として攻撃するが、ソヴエート政府を支配するものは、農民に非ず、勞働に非ず、ユダヤ人によつて指導される最も

苛酷な國家資本主義ではないか――今やソヴエート赤軍は、全世界ユダヤ化の旗幟を掲げて兵力を倍加し、武裝せる前科者プロレタリヤ群を第一線に据え、歐亞兩大陸の諸國を内外から脅威してゐる。世界文化の危機を前に、勇者は敢然起つて偉大なる文化と平和を擁護せねばならない」

尙ヒツトラー自身も次の如く自己の決意を語つて曰く、

「ドツイ國民は全歐洲ボルシエヴイズム化して行くのに、到底無關心では居れない。ボルツエヴイズムの害毒を目前に、ドイツ國民はどうして拱手傍觀出來よう。――ソヴエート政府が歐洲を支配しようなどゝ言ふことは、ドイツ國民は絶對容認出來ない」

このナチス・ドイツの挑戰に對して、ソ聯は次の如き警告的な意向を表明して居るが、これは「覆面の警告」であつて、ソ聯の眞意が那邊にあるかは想像出來やう。

「ヒツトラーはニユルンベルグ黨大會で、再び歐洲を驚かす新手段を準備してゐるのだらうが、ボルシエヴイキ攻擊は、ソ獨兩國間の外交關係上、是非やめて貰ひ度い。尤もソヴエート政府は未だベルリン駐劄大使の引揚げ迄は考慮してゐない」

この警告と同時にソ聯當局の意向を反映した言論界は、直ちに反駁的なナチズム攻擊の論陣を布き、共產黨機關紙プラウダは次の如く痛烈なナチス經濟政策の攻擊を行つた。

「ヒットラーの所謂平和的提言は、要するに、軍備競爭の確認に外ならない。ヒットラーはナチス天國を頻りに約束してゐるが、新經濟策の下に於ても食糧は依然不足するのだから、要するに飢餓と榮養不良とを約束するにすぎまい。――國庫は窮乏を告げ、金準備を減少し、食糧を買ひ込む現金は一文もない。現金は擧げて軍備につぎこむからだ。外交政策については、植民地の要求以外殆ど言及してゐないが、ドイツ政府が收奪的な外交政策を放棄出來ぬ事實に徴しても、ドイツ國内に於ける飢餓窮乏の現實は明瞭だ。ヒットラーはドイツ國民に對し、飢餓と慘めな戰爭を約束してゐるに止る」

この聲明は、ヒットラーの場合にしろ、ソ聯の側にしろ、一つのゼスチュアーであつて、直ちに戰爭を惹き起す原因とはならないだらう。然しソ獨兩國の關係が、以上の如く頗る嶮悪な狀態にある事は事實である。こゝに今度の反スターリン陰謀の裏に、ナチスの手が伸びてゐたといふことは、殊に吾々の注意を惹くに十分である。

十月三日來朝した英國デーリーメール社々長ハワルト・ハームスウオース氏は次の如く語つてゐるが、短い言葉ながら世界の現狀をうがつてゐる言葉である。

「スペインでは叛亂軍が勝つだらう。世界各國のうちで一番安定してゐる國は日本とドイツ位の

ものだ、日本は東洋安定のために率先して支那の平和を唱へてゐるがこれも全部日本に委せ切るならば解決する、他國民はこれについて餘り深い關心を持つ必要はないと思ふ、滿洲國の承認も當然のことで英國としても近く承認するとと思ふがたゞその機會が現在ない迄だ、英國は同様エチオピアに對しても承認せねばなるまい、日英同盟については英國民の多くは期待をかけてゐるが同盟は反米的でない限り繼續される。歐洲には戰爭が起るだらうとの見透しも噂されてゐるが露獨は結局戰ふであらう」

昭和十一年十月十[illegible]日印刷
昭和十一年十月十[illegible]日發行

反革命陰謀の眞相とナチス秘密警察の暗躍
定價十錢　送料二錢

著者　櫻木徹二
東京市杉並區高圓寺七ノ九〇一

發行兼印刷者　楠駿二
東京市芝區田村町四ノ九

印刷所　邦友新聞印刷社
東京市杉並區高圓寺七ノ九〇一

發行所　さんもん書房
振替口座東京一二〇〇二七番

東京市麴町區有樂町二丁目二番地石川ビル
營業所　さんもん書房
電話銀座二五二三番

取次店
東京市麴町區有樂町二ノ二　森田書房
大阪市北區堂島上三丁目二ノ五　新正堂書店

近刊パンフレット

山上進著

税制改革案の全貌と國民生活安定の行方

定價十錢（送料二錢）

× × × ×

いよ〳〵大増税案が發表された。政府は税制整理と言ふ言葉を使つてはゐるが大増税には違ひない。吾々は今回の改革案が國民生活にどう響くかに就て十分に批判し、檢討する必要がある。

驛賣店に品切れの節は直接本社振替東京一二〇〇二七番へ

さんもん書房發行

東京市杉並區高圓寺七ノ九〇一

新刊パンフレット

櫻木徹二著

スペイン革命は何故起つたか？

定價十錢（送料二錢）

スペインの內亂は益々深刻化する傾勢にある。今や全歐洲はスペインを中心として左右兩翼に對立し、いつ何時戰爭が勃發するか豫測の出來ない狀態である。吾々はスペイン內亂の起つた原因について十分考へなければならない。

× × × ×

―賣場に品切れの節は振替口座東京一二〇二七番へ―

さんもん書房發行

東京市杉並區高圓寺七ノ九〇一



大衆旅行雑誌
月刊
旅行春秋
旅に讀む十銭雑誌
全国主要駅売店
誰れでも楽しめる雑誌
旅行案内に最も重宝な雑誌
退屈しらずの面白い雑誌
日本名所巡り・旅であてられた話・週末旅行しるべ・
漫画の旅・私のホーネームーン・
旅の女・旅館案内・西国三十三ヶ所巡り・旅の余徳・

生方敏郞著

ユーモア人生學

特價三十錢
送料六錢

人生を裏から覗けば
漫談論語
不景氣を笑ふ話
合本

發行所 さんもん書房
東京市杉並區高圓寺七ノ九〇一
振替東京一二〇〇二七番

さんもん書房營業所
東京市麹町有樂町二ノ二石川ビル
電話銀座二五二三